

氏名	栗原直子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 4326 号
学位授与の日付	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目 Vascular patterns in nodules of intraductal papillary mucinous neoplasms depicted under contrast-enhanced ultrasonography are helpful for evaluating malignant potential
(造影超音波検査で描出される膵管内乳頭粘液性腫瘍の壁在結節の血管像は悪性度診断の一助になる)

論文審査委員 教授 金澤 右 教授 吉野 正 准教授 貞森 裕

学位論文内容の要旨

膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) の悪性度診断における造影超音波検査 (CEUS) の有用性を検討した。対象は当院で IPMN と診断され手術を行ったもののうち、術前に CEUS を施行した 22 例 (adenoma 11 例、borderline 1 例、cancer 10 例)。全例に CEUS と造影 CT の撮影を行った。CEUS は、vascular image と perfusion image を観察した。22 例中 17 例に壁在結節を認め、CEUS では 15 例 (88.2%)、CT では 12 例 (70.6%) で描出可能で、両者の描出能に有意差は認めなかった。vascular image で結節内の血管を認めたものは 15 例中 12 例 (80%)、うち点状または線状に観察されたものが 4 例 (径 4~5mm)、樹枝状に観察されたものが 8 例 (径 10~53mm) であった。点状または線状の血管を認めたものは adenoma 2 例、borderline 1 例、cancer 1 例で、樹枝状の血管を認めたものはすべて cancer であった。perfusion image では描出可能な結節 15 例すべて染影された。vascular image で描出される壁在結節の血管像と、結節径、組織所見に関連がみられ、CEUS は、IPMN の悪性度診断の一助になる可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

本研究は膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) の悪性度診断における造影超音波検査の有用性について、手術で証明された 22 症例を対象に造影 CT と対比しながら retrospective に検討したものである。22 例中 17 例に認められた壁在結節について、造影超音波検査の vascular image と perfusion image を評価したが、特に vascular image において樹枝状に多くの血流が認められた症例においては有意に癌の存在が高いことが明らかになり、また、壁在結節の存在診断についても造影 CT に遜色ないことが明らかになった。IPMN の造影超音波検査では vascular image で描出される壁在結節の血管像、結節径、組織所見に関連がみられることが明らかとなり、非侵襲的検査である造影超音波検査が IPMN の悪性度診断に有用なことが明らかとなった。IPMN は現在まれではない疾患であり、経過観察対象となっている症例も多いが、本研究はその経過観察の方法に重要な示唆を与える研究といえる。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。